

2011.6.25

No.167

編集 樋口 みな子

E-mail minginga@agate  
.plala.or.jp  
http://briefcase.yahoo.c  
o.jp/bc/ginganews150  
郵便振替「銀河通信」  
02740-7-56535  
(郵送6号分1,000円)



## 大震災から3ヶ月

### 銀河通信が23周年を迎えました。

東日本大震災から3ヶ月。復興に向けて懸命に頑張っている方たちの姿に応援を送りつつも、瓦礫の山はまだ撤去されていませんし、仕事が無く途方に暮れている方たちも多く私に何が出来るだろうと思いを寄せて暮らしています。もっと深刻なのが福島原発の事故です。放射能の危険から北海道に逃れてきた人たちの、生の声も聞こえるようになりました。私は震災支援市民ネットワークのむすび場に登録して、脱原発のフォーラムに参加や



6.17 黄金山のムラサキヤシオ

チャリティコンサートの受付ボランティアなどを始めました。むすび場には福島から3歳になる女の子と札幌に避難してきた女性がいます。私も息子が4歳の頃、泊原発に反対する活動にのめり込んでいたことがありました。子どもの命を守りたいという母親の気持ちが痛いほど理解できます。友人から、子どもたちに豊かな自然を引き継いで行くために原発をなくしたいとの葉書が届いたり、先日の新聞には科学者の小野有五先生らが泊原発の廃炉を求める「脱原発訴訟」を札幌地裁に起こす準備会を発足させた記事もありました。

先日は沖縄から平和のメッセージを、歌とひとり芝居で伝える会沢芽美さんのコンサートに参加し、銀河通信の原点を思い出しました。沖縄戦で集団自決したチビチリガマの悲劇は、1990年に家族で沖縄を訪れ、戦争のむごさを伝えるルポを銀河通信で紹介しました。読谷村に住む会沢さんはその真実から語り始めたのです。30年もの長い間、全国各地で、平和の尊さを伝え歌って来られた方です。子どもの命を絶たなければならなかった母親の苦しみを語り歌った会沢さん。私は涙を禁じ得ませんでした。山に夢中だったこの10年。「それだけでいいの?」と問いかけられたように心に響きました。

父が亡くなって2ヶ月になります。前号を発送してホッとした翌日早朝に静かに息を引き取りました。父も福島県が故郷でした。すっかり道産子になっていましたが、故郷に帰れば福島弁が出ました。天国で両親、兄弟と今の福島を悲しい思いで見つめているのでしょうか?父が夢にでてきたことがあります。



6.17 残雪の増毛の山々

何か伝えたいことがあると夢に現れると言います。まだ若い父が、坂道を登って私のところにきて「大丈夫だよ」と言うのです。どういう意味かすぐ分かりました。小さな悩みを抱えていたのですが、何故か安心しました。

いろいろな事があった春、エゾハルゼミが賑やかに大合唱する初夏が巡ってきましたね。銀河通信も右往左往しながら23周年を迎えることが



6.17 エゾハルゼミの大合唱

出来ました。読者がいなかったら、とても続かなかったと思います。これからもよろしくお願い致します。



## 命の水を求めて 中村哲さんの講演を聴いて



アフガニスタンで28年間、医療支援を行ってきたペシャワール会代表の中村哲さん（医師）のお話を5月21日に聴きました。主催は医療九条の会で会場のエルプラザは400人近い参加者であふれました。

水事情が悪く、人の命を守るために、用水路建設に取り組んできたことをDVDで紹介。およそ20万人が恩恵を受け廃村が次々と復活。近隣の取水口の新設や枯渇した水路の改修も手がけ、14,000haの農地を守っていると話しました。カマ取水口の完成で、農地がよみがえり、難民化していた15万人もの人々が帰農。安定した食物が保証されたそうです。DVDから、人々の喜びが伝わってきました。献身的に働く中村さんを始めとするペシャワール会のメンバーが、アフガニスタンの人々から深い信頼を寄せられている

ることが実感できました。（左写真：講演する中村哲さん）

遠いアフガニスタンと日本。大震災のニュースはアフガニスタンでも大きく報じられました。過去多くの肉親を失い、ひどい難民生活を余儀なくされた人たちは、被災地の悲しみを自分のことのように受け止めていたと語りました。用水路作りに、日本伝統の蛇籠工や柳枝工を採用したのも中村さんの発案だったそうです。小柄な中村さんの強い意志と粘り強さ、温かさに引き込まれました。

中村医師のパキスタンとアフガニスタンでの医療活動を支援するためにペシャワール会の会員を募集しています。年間3000円。郵便振替01780-7-6559

中村さんの本もお薦めです。「医者 井戸を掘る」「アフガニスタンで考える」等。

## 子どもたちの未来を作る会のフォーラム

福島原発事故以来、札幌では毎日のように反原発の講演会が開かれています。銀河通信の読者でもある安川誠二さんが「子どもたちの未来を創る会」の事務局長をしています。応援したいと6月2日、フォーラムに参加しました。180人が熱心に耳を傾けました。



講演したのは地元で泊原発に30年間反対し続けている斉藤武一さん、

自然エネルギーを推進しているグリーンファンドの鈴木亨さん、福島県の現状を吉田美千代さんがお話ししました。

斉藤武一さんは泊原発の地元で故郷の海を守りたいと、25歳から、岩内港防波堤で毎日、海水温を観測し続けてきました。泊原発が稼働するようになってスケソウもアワビもいなくなったそうです。魚が捕れなくなるのですから、人体に影響がないとは思えません。福島原発の事故から3ヶ月たっても収束のめどが立っていません。一度事故が起きたら人間の技術では制御不能に陥ってしまうことが明らかになりました。斉藤さんは、今回の事故で、泊住民の意識も変わってきたと言います。正面きって反対はしないけど「斉藤さん、頑張ってください」と声をかけてくれるようになったそうです。

鈴木亨さんは、風力や、太陽発電に変換していくことで電力はまかなえると話しました。札幌在住の吉田美千代さんは、福島に行って住民の苦しみを目の当たりにした体験を語りました。フロアーから福島のリンゴ農家の人が「これから農業をやっているのか不安」と発言しました。

6月22日、余市町議会では原発停止を求める意見書を全会一致で採択したと報じています。被爆者で医師でもある肥田舜太郎さんは、原発や核兵器から作り出される放射線は、人類にとって未知のもの。地震国である日本から原発をなくしていかなければならない。核兵器廃絶の運動と同じくらいの熱意が必要だと語っています。また天声人語は、原発の是非は、54基が存在する現実からではなく、原爆の非人間性にまで立ち返って考えたい。未来に何を渡すか。この分かれ道、いささかも侮れない。と結んでいます。

### 4.28付 北海道民医連新聞



6.1 尻別岳のコキンバイ

### 原発のなごりをつなぐ

友の会 樋口みな子

(江別市)

大震災でいわき市に住む伯母の自宅が流され、孫と共に栃木県に避難しています。原発事故には、政府の対応の悪さに怒りでいつぱいです。反原発を貫いた高木仁二郎さんは生前「科学とは市民の不安を共有し、その元を取り除き、人々の心に希望の火を灯すものであるべきだ」と、話されました。原発推進の学者たちが「命には影響ない」と主張し続ける姿が空しい。私は原発なしの暮らしを望みます。

## みな子の山旅日記

父が亡くなってしばらくは山歩きはお休みしていましたが、1ヶ月を過ぎた頃から小さな山を登り始めています。

今年は雪解けが遅く、残雪や春の花を長く楽しめました。桜も5月末までありました。桜開花まで待たずに亡くなった父に見せたかったなとしみじみ思いました。それほど、今年の桜は美しかったです。野幌から大麻までの鉄道脇の桜が私のお気に入りのスポットです。



5.9 北大構内のサクラ

## ブナ林が美しい黒松内岳（740m）



5.19 後を振り返ると黒松内岳の勇姿が

5月19日、厚別、新札幌の山仲間8人で黒松内岳に登ってきました。登り始めは雨は降っていないものの視界はまったくありません。いきなりの急な階段にたじろぎましたが、やがてブナ林のやわらかい緑に癒されながら歩を進めました。528mの標高点を過ぎると下りになり、頂上が見えるはずが全く視界はありません。高度を上げるにつれて傾斜はきつく、雪崩斜面です。頂上直下はさらにきつい斜面。先頭を行く人のキックステップに、慎重に私たちも続けました。

頂上からは、かすかに大平山が見える程度。「せっかく来たけど、何も見えないね」と残念な気持ちで下山し始めて30分。後ろを振り返ると何と黒松内岳の雄姿がくっきりと望めるではありませんか。ウワー、こんな厳しい斜面を登った

の？と驚きと感動でいっぱい。眼下にはダイナミックな風景が広がっていました。小粒な山ながら、素晴らしい山でした。

登山口から少し上がったところまで、まだカタクリが咲いていました。頂上付近は雪で、春と冬が同居している山を満喫しました。

タイム：登山口9:50 出発 528m地点10:50 頂上12:00 下山開始13:30 登山口14:10



## 緑の山、風不死岳北尾根コース（1102.5m）

5月25日、4人で風不死岳北尾根コースを登りました。

5合目から6合目が一番長くきつかったです。8合目まで登ると眼下に支笏湖の紺碧が美しい。最後の難所のがれ場を超えると頂上でした。恵庭岳がすぐ近くに見え、羊蹄山もかすんで見えました。このコースを登っていたのは私たちを含めて2組だけ。支笏湖と緑の樹林の風景が、登りのつらさを忘れさせてくれました。花は少なかったです。

タイム：北尾根登山口 9:55 出発 8合目11:50 ランチタイム 頂上12:50 下山開始13:10 登山口14:40



5.25 眼下に支笏湖がきれいです

## 爽快な山 銭函天狗山（536.7m）

5月30日、3人で銭天登山。国道5号線から小樽に向かうと岩壁がそびえる印象的な山です。先週登った風不死岳北尾根コースよりも、かなり急な登りでした。

登山口から少し登ったところには、キクザキイチゲ、ヒトリシズカが咲いていました。中腹では、シラネアオイが咲き始めています。新緑が美しく、登りのつらさを少し和らげてくれました。

頂上少し下から石狩湾と増毛の山々が美しかったです。

小さな山とは思えぬほど高度感もあり、登り、登りの急登で短いながら達成感がありました。

タイム：登山口10:45 頂上12:00 下山開始13:15 登山口 14:05



5.30 頂上からは石狩湾が雄大です！

帰りに朝里のなると屋で若鶏半身揚げをお土産に買って帰りましたが家族に大好評。外はパリッと、中は柔らかくて美味しかったです。



## 羊蹄山の展望台一尻別岳（1107.4m）



6.1 尻別岳頂上で

6月1日、女性4人で尻別岳 留寿都コースを登りました。

刈り分け道は整備されて、歩きやすかったです。メンバーの目は竹の子の目になって、次々と竹の子をゲットします。これでは前に進みません。竹の子は帰りにと決め、ようやく登山モードに切り替わりました。大きなダケカンバが印象的。773mピークまではか



シラネアオイが可憐

なりきつい登りです。足元には、タチツボスミレ、コキンバイの群落。シラネアオイが見ごろです。ハクサンチドリ、チシマフウロ、エゾカンゾウ、ナツトウダイ、フッキソウ、ヒトリシズカ等、たくさんの花と出会えました。登山者は私たちだけ。コルからの尻別岳は壮観でした。頂上からは羊蹄山が美しい。昆布岳やニセコの山々、恵庭岳、風不死岳、白老三山や、ホロホロ山や徳舜瞥、無意根山360度の眺望に感激でした。夏は、遮るものがないので暑さが厳しそうです。春の花を楽しむには今が最適です。眺めよし、高度感もあり、登りがいのある山でした。

私は、息子が小学生の時に家族3人で登った懐かしい山でした。10数年前でしたが、その時は、曇りの上に風が強くなんにも見えず、がっかりした記憶が残っています。2009年10月には喜茂別コースの笹刈りを山メーリングリストの仲間30人で行いました。笹が生い茂り、急登にあえぎながら登山道を整備した時の爽快感も格別でした。そんな思い出多い山にまた登ることが出来楽しかったです。タイム：登山口10:45頂上13:00 昼食(竹の子採りがなければもう少し早い)下山開始13:40 ウドや竹の子を少しいただき、登山口15:30



## フォルクローラライブで夜が更けて一万計山荘の夏開き



紛れ込んだシジュウカラ

6月11日曇り 8:00に真駒内のグラウンド横に集合。万計山荘の夏開きなので、事前に森林管理局が林道の鍵を開けてくれました。RV車に乗り換え、つづら折れの道を行き、山荘に向かいました。札幌市民が愛する山といえば空沼岳です。中間地点にある万計山荘は、トイレに、休憩に泊まりにと利用されています。

この日は万計山荘友の会のメンバーが、間伐材の小屋への搬入、夕食の70人分の山菜採り、小屋の清掃班と分かれて仕事をしました。私はトイレ掃除を担当しました。夏にいくといつ



6.11 フォルクローラライブは夜が更けるまで続きました。

もきれいなトイレで感謝しますが、今回はかなり汚れていました。ティッシュもあふれていました。清掃して快適になりました。空沼岳に登る方は、どうぞきれいに利用してください。

11日は夏開きの前夜祭で夕方になると演奏者や、遠方からの参加者が続々と到着。総勢70人近くになりました。夜はフォルクローラライブで盛り上がりました。夜空には星がまたたき、万計山荘に集った人々たちを見守っているかのようでした。

さまざまな山岳会が集まり、自己紹介。北見からクーラカンリが8人。中央労山、やまびこ、札幌登攀クラブ、日本山岳会、札幌山の会等。それらの会の個人が会員になって山荘の管理に協力しています。

山菜班が収穫した、ウド、ふき、竹の子、膨大な量の皮むきに女性陣が奮闘。とても美味しかったです。私は用事があり、12日早朝に帰りましたが、10時から小屋開きセレモニーが開かれたようです。



針葉樹に囲まれた万計沼で憩う山ガール

# 威風堂々の山一黄金山（739.5m）



6.17黄金山頂上で

6月17日、快晴。4人で黄金山登山。分岐からは新道コースをたどり頂上に。出会ったのは、関西からの3人グループと山ガールと中年カップルの二組だけ。急な樹林の尾根をあえぎながら登ると岩場に出ます。

そこから少し下って短い登りで頂上です。

前ピークでの360度の大展望に感激しました。北に増毛の山々。残雪の幌天狗、郡別岳、奥徳富岳の連なりが雄大です。札幌近郊から積丹班半島の山までが見渡せました。



国道から見る黄金山

岩場にはイワキンバイ、ミヤマアズマギクがたくさん咲いていました。静かな山で賑やかだったのは、エゾハルゼミの大合唱でした。ムラサキヤシオが青空に映えていました。

下りは旧道をたどりました。急な上に足場が悪くロープにつかまりながら降りますが、一難去ってまた一難。旧道は登りに利用したほうが良さそうです。分岐手前のなだらかな登山道には、ニリンソウやミヤマスマレがいっぱい。エンレイソウも咲き、春と夏がいつぱんに来たようでお花も楽しめました。

タイム：登山口8:35 分岐9:00 頂上10:30 前ピークから旧道を下山開始11:20 登山口12:35



ミヤマアズマギク



ニリンソウ

## 東日本大震災復興支援チャリティ 会沢芽美コンサートに参加して

震災支援ネットのむすび場から前日電話をもらい、6月21日自宅を8時に出て、白石にあるカトリック教会に向かいました。ところが始めて行く場所で道に迷いながらようやく会場にたどり着きました。

コンサートの受付をとのことでしたが、お誘いが十分でなかったのか、関係者だけで会沢芽美さんのコンサートが始まったのでした。オープニングはさとうきび畑。会沢さんは、「自分の出来ることは沖縄から平和のメッセージを伝えること。沖縄に移り住んで37年。沖縄の痛みを知った者として伝えたい」と語りかけました。1年に100回以上のコンサートをこなし、日本中を駆け回っています。小樽生まれの仙台育ちです。

会沢さんが着替えている間に、私が「証言」を朗読することになりました。

そして会沢さんの一人芝居「もうひとつの戦争」が始まりました。子どもを泣かすな！とてっぽうで脅す兵隊に愛しい幼児を殺さなければならなかった母の悲しみを切々と演じ、私も涙をこらえきれなかったです。沖縄戦で集団自決したチビチリガマの話（1面で触れました）や、読谷村にある「憲法九条の碑の話、沖縄の基地と原発は根っこは同じだには全く同感。

手話を交えて、みんなで歌って踊って楽しいひとときでした。観客はたった



「もう一つの戦争」を一人芝居で熱演する会沢さん

6人だったけど、深いお話が聞け、震災のボランティアに行ってきた人のお話も聞け、ここでの出会いで人と人がつながる不思議さ、会沢さんが気づかせてくれた平和の尊さ。出会った方たちはみんな初めての人ばかりだったけど、豊かな時間でした。

この記事を書いている6月23日は沖縄戦で犠牲になった人々の慰霊の日。今も米軍基地に苦しめられている沖縄に思いを馳せました。



証言を朗読する私



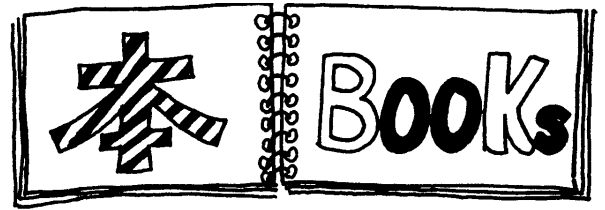
写真提供：鳥居明子さん 会沢芽美さん（右から2人目）を囲んで





## 北海道の登山史探求

高澤光雄著 北海道出版企画センター  
1200円



著者の高澤光雄さんは、北海道を代表する登山史研究家です。日本山書の会会員であり日本山岳会会員。本書は黎明期の北海道登山の足跡を辿っています。

高澤さんが永年にわたって探求してきた北海道の山岳記録を丁寧に発掘し、思い入れの深い16編を選び収録。

アイヌ伝承の山では、アイヌの生活と密着したその山らしい名前があり、漢字で当て字するのではなく、カタカナでアイヌ語名を併記するべきと述べています。羊蹄山はマッカリヌプリと併記してくれると山の後を迂回して流れる上流の山とわかります。

深田久弥の日本百名山に紹介された松浦武四郎の羊蹄山登頂についても、さまざまな文献を調べ、事実でないことを発見しています。

北海道から最初に日本山岳会に入会した河合篤叙と蝦夷富士登山会との関わりも興味深い。羊蹄山が明治38年には多くの登山者でにぎわっていたこと。登山事務所には、登山者の便宜を図って登山用具を置いたという。「山岳」や当時の新聞などを丹念に読み込み明らかにしています。その頃の活気が目に見えるようです。

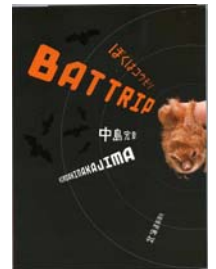
高澤さんは、伊藤秀五郎の著書「北の山」に惹かれ、本の中に出てくる北海道の山をすべて登ってみたい気持ちになり、登山道のなかった狩場山や、日高山脈に入るきっかけになったと述べています。「北の山」にも登場する増毛山道と武好駅通の探求に、高澤さんは平成9年、増毛山道の会の歴史家、伊達東氏とかがね山岳会の渡辺千秋さんと調査にでかけます。藪をこぎ、廃墟の遺物探しの様子が語られます。車で短時間で、どこにでも行ける時代になったけれど、不便な山道を辿って、人の気配もない駅通で一夜を過ごし、さらに山へと入っていく何とも豊かな時間が羨ましくも思えました。

イグルーを北海道に紹介したフォスコ・マライーニ。日高山脈を描き続けた坂本直行等。北大山岳部が出来る前に「山とスキー」が月刊で発行された資料も満載。先に「北海道登山史」を出版した安田治さんとは違った切り口で、北海道の登山文化を切り開いた人々を紹介しています。

私はこの本をきっかけに伊藤秀五郎の「北の山」を読み始めています。

## BAT TRIP ぼくはこうもり

中島宏章著 北海道新聞社1500円



組写真「BAT TRIP」で第3回田淵行雄賞を受賞した作品をまとめたのが本書です。

森の枯れ葉の中で眠るコテングコウモリ、地下の水路に逃げ込んだモモジロコウモリ鏡のような水面に優雅に飛ぶドーベントンコウモリ、知床の海上を飛翔する神秘的なモモジロコウモリ、雪の中で眠るコテングコウモリ等。コウモリって可愛くて美しいなと思ったのはこの本を眺めて読んでから。こんなにたくさんの種類があることさえ知りませんでした。

中島さんは、枯れ葉で眠るコテングコウモリを自分で見つけられるようになるまで4年を費やしたといいます。写真を撮れるようになるまでには、数知れずの失敗を経験しています。そのコウモリの気持ちかわかる？ようになるまでの苦労がユーモラスに綴られ、コウモリたちもまったく自然体なのです。中島さんがコウモリの目になっているかのようです。中島さんは「動物の気配が全く感じられない森の中にも確実に動物が暮らしている。ただ、われわれが気づかないだけだとわかったのは、コテングコウモリのおかげだ」と書いています。

コテングコウモリを枯れ葉に宿る神様と名付けています。写真家である前に、動物生態科学者のようにひたすらに観察しているのです。枯れ葉のコテングコウモリからさらに3年。雪の中に眠るコテングコウモリを発見。何とも愛らしい姿は本書をご覧ください。

コウモリの目からとらえたキツネやオオワシ、風景などの構成も楽しく、絵本のように何度も開きたくなる写真集です。



6.17 黄金山のイワキンバイ





## それでも人生にイエスと言う

V・E・フランクフル著 山田邦男・松田美佳訳 春秋社1700円

著者はナチスによって強制収容所に送られた経験を基にして書いた「夜と霧」で有名な精神科医です。いつ殺されるかもわからない状況で、ユーモアを忘れず、自由な精神を保ち続け生きる意味を問い続けました。このテーマをさらに深く掘り下げたのが本書です。

3.11東日本大震災で家も家族も職も失った多くの人たち。福島原発事故で放射能汚染に苦しむ人々。希望に変えられる生き方があるのだろうかこの本を読みました。

著者は、さまざまな逆境を例に、そこでどう考えるかを提案します。不治の病にかかり、余命を告げられた人、非生産的な毎日を送っている老人、病気で働くことも出来なくなった人。著者は「ただそこにいる」だけで子どもや孫の愛情に包まれ、代替不可能でかけがえのない存在もあると説きます。たとえ全てのものを取り上げられたとしても、人としての自由を取り上げることが出来なかった強制収容所の体験を語ります。でもそう考える人は稀だと思います。

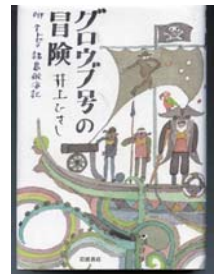
フランクフルは、人生こそが問いを出し、私たちに問いを提起していると述べていますが、逆境にある人、真面目に生きている人が報われる世の中であって欲しいです。そういう前提があった上で、人としての自由が成り立つのではないのでしょうか。でも著者が語る、生きることはいつでも課せられた仕事だという考え方は大事だと思いました。ストーンと胸に落ちる本ではなかったけれど、幸せが人生の目的ではないと言い切る著者の言葉に目からウロコが落ちました。

## グローブ号の冒険 井上ひさし著 岩波書店 1900円

山田山は東大法学部を卒業した相撲取り。親方からその知性を買われて、外国人力士のスカウトにカリブ海を巡ります。しかし、船は大波に遭い、小さな島に漂着します。そこは通貨も政治もなく、食糧に困らないユートピアでした。

近くの島では海賊船グローブ号が突如帰港し「20世紀の巨人」と呼ばれる老博士が海賊船から宝の隠し場所をおおず謎の歌を再生。世界的企業も含めて、再び島に戻り、宝探しが始まります。ひょっこりひょうたん島を彷彿とさせる物語です。

未完ですが、井上ひさしさんのユートピアへの思いが込められています。山田山と美少女とのロマンスあり、冒険あり。パズルを解く面白さも十分。宝がどうなるのか、お金の無い世界で生きてきた島人がどうなるのか？結末は私たちの想像力にゆだねられています。



## 樹木ハカセになろう 石井誠治著 岩波ジュニア新書 940円

樹木医である石井さんが、樹木について基礎的な知識を平易な言葉で教えてくれます。木を人間の体にたとえます。たとえば「葉で考える木たち」の章には、光合成産物を生産しているのは主に葉だといひ、地球に暮らすすべての生き物の命を支えていると。緑の葉が生き生きとした樹木を見ているのが好きです。心がやすらぎ、木からエネルギーをもらえるような気がします。

石井さんは、葉も枝も全部切り落とすような剪定は良くないと語ります。「そうだ、そうだ」と嬉しくなりました。我が家のナナカマドもリンゴものび放題なのです。近所に住む母から「落ち葉が隣の家に迷惑をかけるから伐ったら」とたびたび言われます。この本で剪定のしすぎは良くないことが証明されました。

木の心臓はノミの心臓だとし、細くて長い細胞が連なる水の手渡しが繰り返されると100もの高さを水は上がっていくという説明や、根は胃や腸の働きをしているとする説明も面白かったです。

物言わぬ木々の命のいとなみを語る石井さんの樹木への愛情が伝わってきます。

江戸には800の橋があると言われるほど掘割があり、水上交通が発達。その基礎を作った木がシダレヤナギだったことも興味深かったです。時代劇にヤナギが良く出てきますね。北海道の木が少なかったのが残念でした。

中高生向けに書かれた本ですが、大人も樹木に関心を持つきっかけになる入門書で楽しめます。

ユーラシアのまなざし、ソ連崩壊後の環境問題のセミナーも紹介したかったのですが紙面が無くなりました。原発問題は近隣諸国にも影響を及ぼしました。セミナーからユーラシアの一員として連携して環境を守っていくことが大切だと目を開かれました。次ページの映画は2本の紹介にとどめました。5月14日、夕張でユウパニコザクラの会の総会に出席。穂別とむかわの合併問題を70歳以上の素人町民が演じた映画「いい爺いライダー」が痛快で元気が出ました。山以外にも視野を広げた2ヶ月でした。(みな子)



# 映画



## ショウジとタカオ

井出洋子監督

6月8日に再審無罪が確定した布川事件の桜井昌司さんと杉山卓男さんの日々の闘いや素顔をとらえたドキュメンタリーです。

記録は仮釈放された1996年から2010年までの14年間の二人を追います。冤罪がどのようにして作られたのか、ショウジとタカオの証言に胸を突かれます。獄中でショウジは

支援を訴える手紙を書き続け、タカオは作家の佐野洋氏に手紙を送ります。無罪をわかってもらうには支援者や弁護士たちの献身的な支えと闘いがありました。二人が社会に戻る過程を丹念に記録。切符を買うのにとまどうタカオ。廃屋になった実家に呆然とするショウジ。29年間も獄中にいたのに豊かな人間性を十分に引き出して、単なる告発に終わってはいません。

奪われた人生を取り戻すかのように家を探し、職を求め、それぞれに伴侶も得ます。新しい人生を切り開いて行く喜びがあふれる桜井さんと杉山さん。無罪を勝ちとるといふ目的があり、支援者の支えがあればこそです。映像は、不思議に明るくユーモアがありますが、長い歳月を無実の罪で、刑務所で過ごさなければならなかった苦しみや悔しさが浮かび上がってきます。

小柄だけど、歌が上手で器用に家を直す桜井さん。背が高くおしゃれで几帳面な杉山さん。20歳の頃は街のちんぴらだったといいます。強盗殺人の犯人として別件逮捕されて、自白を強要されたのです。桜井さんの妻、恵子さんが語ったシーンが冤罪の怖さを如実に語っています。「深夜、夫が突然、爆発しそうだと呼び、マンション4階から飛び降りようとした。必死にしがみついて止めた。私がいて良かった」と。「壊れそうになるほど人を変えてしまうのが冤罪なのか」と恵子さんは強く思ったと語っています。支える人がそばにいて良かったなあと涙があふれました。

繰り返される冤罪。もっと早い段階で無罪になっていたはず。非人間的な裁判のあり方に一石を投じたドキュメンタリー。多くの人に観てもらいたいです。二人のこれからの人生が幸せであって欲しいです。（前半、ナレーションのショウジとタカオに習いました。桜井さんと杉山さんのことです。）

## 神々と男たち

フランス・グザヴィエ・ボーヴォワ監督



1966年のアルジェリアで起きた、武装イスラム集団によるフランス人修道士の誘拐・殺人事件を映画化。人間の尊厳と使命を問います。

山あいにある修道院。8人の修道士が、質素な暮らしの中、村人たちの医療活動を行い、祈りと労働の日々を送っています。内戦の激化でテロが頻発。

修道士それぞれが、アルジェリアに残るかどうかが決断を迫られるのです。村人を見捨てられないと悩みます。とどまるべきか、帰国すべきか。殺される恐怖と信念のはざままで話し合う修道士たち。

聖歌がその信念を確かめるように響きます。最後の晩餐会。万感の思いをこめて盃を交わします。苦悩と思考の末に、神に仕える者としての覚悟を決めた厳かさがありません。それぞれの思いがひとつになり敬虔な美しさをたたえた修道士たちがクローズアップされます。圧倒的な力で彼らの心の内に迫ります。不意を突いて流れるチャイコフスキーの「白鳥の湖」に胸が締め付けられました。

生と死のはざまでゆれる修道士は、信仰があっても同じ人間です。テロによる殺人はあまりにも理不尽です。でも、宗教が違って分けて隔てなく村人たちとつきあい、労働も共にした修道士たちの人間としての尊厳が深く心に刻まれました。

**購読料をありがとうございます  
(敬称略) 4/27~6/15**

発行が遅れがちで申し分けないですが郵送希望の方は6号分1000円のお振り込みにご協力ください。買いためていた切手も残り少なくなりました。ウェブ読者は無料ですがカンパも歓迎します。

亀田法子 (江別市) 3000円 (カンパ含む) 山川陽一 (多摩市) 4000円 (カンパ含む) 秦野公彦 (安平町) 1000円 神原照子 (登別市) 1000円 海川敏雄 (函館市) 3000円 (カンパ含む) 中川悦子 (札幌市) 5000円 (カンパ含む) 森内実江 (江別市) 1000円と切手10枚 仲俣善雄 (札幌市) 1000円 土岐政美 (札幌市) 3000円

合計 22,000円は印刷と送料に使わせて頂きます。斉藤征義さんから著書をいただきました。

東日本大震災支援ネットむすび場に小野先生退官記念冊子売り上げの8000円を銀河通信読者有志として寄付しました。あわせてありがとうございました。



4.30 突硝山のカタクリ